globe.asahi.com
GLOBEのiPad用アプリ、AppStoreで無料配信中
Twitterで発信中 @asahi_globe
(G-5面から続く)

USA [米国] 匿名の提供精子で誕生、遺伝子検査とネットで父親探し

ルーツが知りたい。つながる異母兄弟

自分のルーツを知りたいと苦しんでいる人たちがいる。父の不妊などが理由で、母が匿名の男性から精子提供を受けて生まれた子どもたちだ。遺伝子検査の普及やインターネットが、この人たちの「ルーツ探し」を劇的に変えている。

米西部ユタ州のソルトレークシティーに住む建築家のビル・コードレー(68)が提供精子で生まれたと知ったのは、37歳のときだ。父親と弟の死をきっかけに、母から知らされた。

やっぱりそうか、と思った。父は体を動かすのが得意なのに、自分は本や芸術を好むことに、子どものころから違和感があった。見た目も似ていない。「長年だまされていた、と怒りがわいた」

遺伝上の父親はだれなのか。ルーツ探しが始まった。母の主治医は「提供者は1945年卒業組のユタ大学の医学生」とだけ母に伝えていた。卒業生名簿を手に入れ、31人が「候補」になった。地元紙の医療記事や専門誌を調べて顔写真をそろえた。しかし、決定打はない。

ある本に「精子提供者は母親の主治医が多い」とあった。その医師は31人の「候補」には入っていないが、自宅を訪ね、思い切って切り出した。「あなたのおかげで私がいる。ありがとう」。80歳近い相手は、父だとは認めなかった。

父親を特定したのはごく最近だ。2012年秋、DNAで遺伝的なつながりを調べるサイトに唾液を送った。費用は100ドル(約1万円)ほどで済む。

その検査で、アイダホ州に住む男性と、遺伝的つながりがあることが分かった。彼は家系の詳しい報告を送ってくれた。ソンドレという名のノルウェーからの移民が、共通の曽祖父のようだった。

ソンドレは1850年、モルモン教徒に嫁いだ姉を頼ってユタ州に移住した。ソンドレには13人の子がいた。孫は50人以上いるだろう。ビルの父はだれなのか。家系報告の後ろに、ソンドレの英語名が小さく載っていた。自分が訪ねた母の主治医の名字だった。モルモン教徒の家系を調べるサイトで確認すると、医師はソンドレの孫だった。

ビルはこの半年ほどで、同じドナーから生まれた異母きょうだい6人、いとこ2人、おい・めい3人を見つけた。きょうだいの一人、アン(59)は水色の澄んだ目や、淡い栗色の髪がビルそっくりだ。アンはDNAサイトをのぞくのが日課だ。「2週間に1人、新たなきょうだいや親族がみつかる。その現実をどう受け止めていいのか、まだ分からない」

米国では毎年約3万人、累計100万人以上が提供精子で生まれたと言われる。経済的に余裕のある白人家庭が多い。1980年代には精子バンクが普及。バンクは、匿名のドナーでも番号は開示している。バンクの精子で生まれた子どもはドナー番号を使ってつながりはじめた。

よく使われるのが「ドナーきょうだい登録(DSR)」というサイトだ。親や本人がドナー番号などを登録すれば、同じドナーから生まれた人が分かる。

DSRをつくったウェンディー・クレーマー(55)を、米西部コロラド州の山あいに訪ねた。自身も大手精子バンクから精子を買い、90年に長男ライアンを産んだ。ライアンは成長するにつれ遺伝上の父への関心が強まる。誕生日の願いごとはいつも「父さんに会いたい」。

2000年、10歳のライアンは、学校から帰る車の中で母に提案した。「ネットの掲示板できょうだいを募りたい」

最初の投稿は「ドナー番号1058を探しています」。それから7年、三つ下の妹がみつかった。ニューヨーク・セントラルパークで待ち合わせすると、妹と一目で分かった。ほかに2人の姉妹をみつけ、いまは4人きょうだいだ。年1回は集まる。

父も分かった。DNA検査を受けたら、そのDNAサイトに登録する2人と遺伝的なつながりがあった。2人はほぼ同じ名字だった。一方、ライアンは精子バンクから生年月日などの情報を得て、住所のあるロサンゼルスでその日に生まれた人を一覧表にしていた。その中に、名字が合う人がひとりだけいた。

父に会いに行くと、理知的な語り口のエンジニアだった。ライアンも数学が得意で、14歳で大学に入り航空宇宙工学を学んでいた。ライアンは「ユーモアのセンスまで似ていた」と感じた。

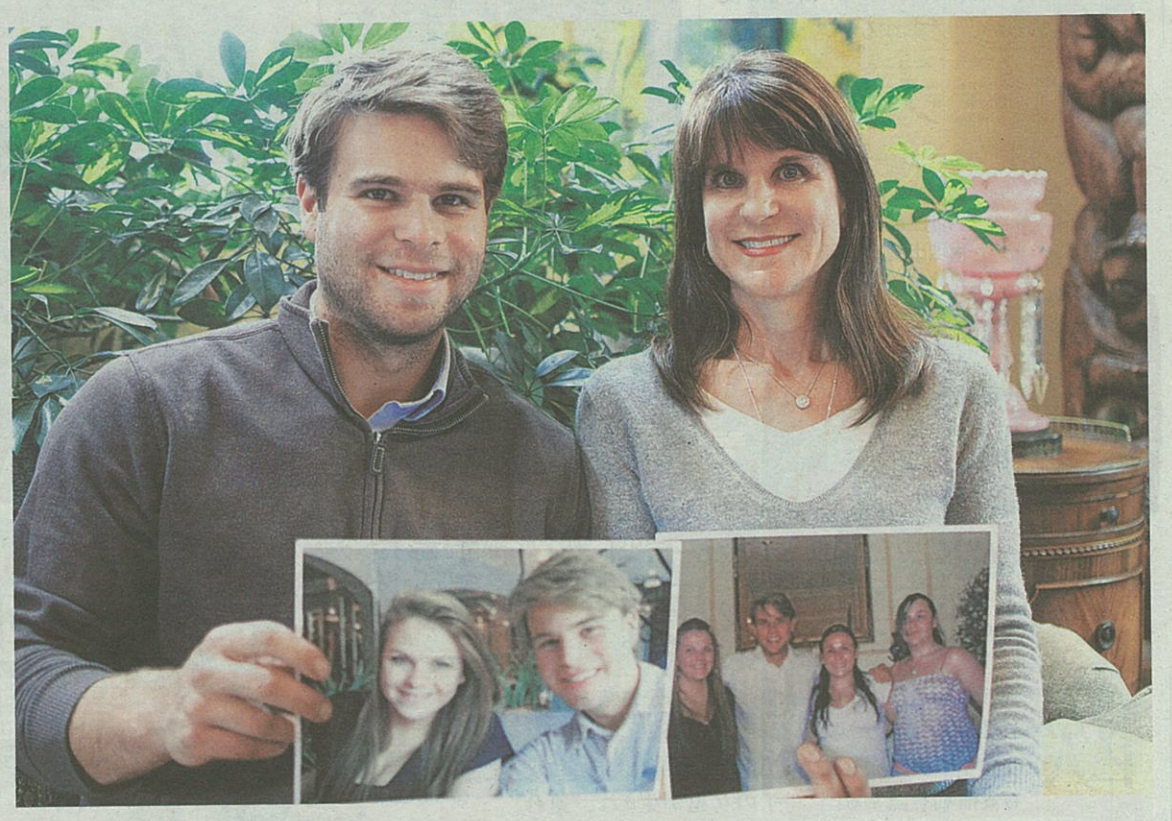
帰りの機内でライアンが話した言葉をウェンディーは忘れない。「もし二度と父と会わなくても、僕は大丈夫。自分の半分がどこから来たか、分かったから」

DSRには世界中から4万3000人以上が登録し、1万1000組の親子やきょうだいがつながった。1人の精子ドナーから約200人が生まれていたケースも。多すぎると子孫が近親婚してしまうリスクが大きくなる。1人から100人以上生まれていた例が、10以上あった。(江渕崇)

1990 Ryan & Wendy Kramer

「父と会わなくても、もう大丈夫。自分の半分がどこから来たか分かったから」

ライアン(左)



ライアンは、母ウェンディー(右)が匿名の精子提供を受けて生まれた。2人はネットで異母姉妹3人を見つけた。
photo: Ebuchi Takashi

Japan [日本]

学生名簿が手がかり

日本にも自分のルーツを探し続ける人がいる。横浜市の医師、加藤英明(40)は医学部の実習で血液検査を受け、父と血がつながっていないことを知った。「自分の半分が持って行かれて、荒野に放り出されたように感じた」

母は慶応大病院で人工授精を受け、ドナーは医学部の学生だという。当時の3〜6年生計約400人の名簿を集めた。医学誌などから顔写真も一つひとつ手に入れた。10人ほどに直接会ったが、だれも精子提供は認めなかった。

加藤は今春、慶大病院側に提供者を開示するよう求めたが、「記録は残っていない」と断られた。

日本で初めて、提供精子による人工授精で子どもが生まれたのは1949年。この60年、推計で1万人以上が生まれた。

石塚幸子(35)もその一人。23歳のとき、父の遺伝病をきっかけに母から事実を知らされた。石塚は加藤らと、同じ境遇の人たちでグループを作ったが、まだ10人ほどとしか接触できていない。石塚は「多くの人は事実を知らされていないのだろう」。

遺伝上の父やきょうだいを見つけたビル・コードレー。
photo: Ebuchi Takashi

出自を知る権利を認めると、ドナーが減って不妊夫婦の不利益になる、との心配が医療界に根強い。しかし、子どもの福祉に詳しい元帝塚山大教授の才村眞理は「知る権利を優先すべきだ。当事者が直面する悩みは生死に関わるほど重く、見て見ぬふりをするのは社会的な虐待に近い」と言う。(江渕崇)

TOPIC

「出自知る権利」各国で違い

生殖医療で生まれた子どもの「出自を知る権利」について、英国と北欧のいくつかの国は例外的に認めている。スウェーデンは1984年に制定された「人工授精法」で、第三者の提供精子で生まれた子どもが、18歳に達した時点で、提供者に関する公的記録を見ることができるようにした。精子提供者には匿名が認められず、その記録は、治療を行った病院で保存される。

英国でも、2005年4月に改正された「ヒト受精及び胚研究法」により、匿名での精子提供は認められなくなった。

いずれの国でも、匿名が認められなくなったことで提供者の数は激減。未婚の学生や兵士が中心だった提供者も、より年齢が高く、子どもがいる男性が中心になったという。

では、子どもたちの「出自を知る権利」は実際に行使されているのか。埼玉医科大教授の石原理(おさむ)によると、スウェーデンで人工授精法の施行後に生まれた子どもが18歳に達した2003年以降、精子提供者の記録の閲覧を求める人は、数人にとどまっているという。

石原は「事実を親が子どもに伝えていない可能性もあるが、むしろきちんと伝えているがゆえに、子どもはあえて生物学上の親を探す必要性を感じていないのではないか」とみている。(後藤絵里)